

法政大学学術機関リポジトリ  
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

## <書評>北島正元編「幕藩制国家解体過程の研究 : 天保期を中心に」

出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	33
ページ	83-89
発行年	1981-03-23
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/10277">http://hdl.handle.net/10114/10277</a>

## 【書評】

北島正元編 『幕藩制国家解体過程  
の研究——天保期を中心に——』

本書は北島正元先生の還暦記念論文集のうち下巻に当るもので、とくに副題に「天保期を中心に」とあるように、天保期前後の諸問題を収録した研究書である。幕藩制国家の解体過程における天保期および天保改革は、きわめて重要な時期に当り、多角的な研究の成果が要求されているといつてよい。現在に至るまで、この時期の個別論文は数多くの貴重な研究成果を生んでいるが、本書は同じくそれぞれの専攻分野から、この時期の問題を追求した。個別成果であるといつてよい。したがって、一応、共通テーマをあげながらも、実際には個別論文の集合体という感がまぬがれない。しかし、こうした本書の性格が、むしろ現在の幕藩国家の研究水準を示しているということもできるのである。

本書の構成は、寛永期の論文集と同様に、はじめに北島先生によって天保期の歴史的位置づけが行われている。それと同じく全体を幕藩制の解体と農村構造（六論文）、都市と市場構造の変動（四論文）、階級対立と支配の変容（四論文）の三部、一四点が収められている。次に各論文の内容を紹介し、若干の論評を加えることにしたい。

## ◇幕藩制の解体と農村構造

## ①菅野則子「封建制解体期畿内農村の構造」

この論文は畿内綿作地帯を対象に、天保期以降幕末に至るまでの農民諸階層の検討をおして、下層農民の実態を明らかにしている。天保末年・安政年間、明治初年をそれぞれ画期とし、天保末年以降、大規模地主の停滞乃至安定性が動揺し、中小地主による地主小作関係の再編がみられ、小高持層が減少して無高借家層すなわち半プロ層が増大していくとする。また、奉公人の雇傭関係を見るとき、特に安政期以後、上層農民にはこの動揺があり、出奉公人を出現させている一方において、無高層による雇傭もみられた。しかし、明治初年に至り、大規模地主が混迷を脱して地主小作関係と雇傭関係が整合してくるとされている。そして、さらに続けて慶応三年の小作料減免闘争を分析され、これには小農へ回帰しようとする要求しながら事実上小作関係からも排除された半プロ層が参加しておらず、結局、この闘争は村方騒動の域を出るものではなかったとされるのである。

なお、以上の問題にかかわることとして、佐々木潤之介説対津田秀夫説、同じ史料を使って分析されている津田氏の見解対菅野氏の見解を明らかにしてほしいと思える。

## ②伊藤好一「江戸周辺農村における天保期の窮民層」

この論文は窮民層の形成とその動向を考察し、それが幕府の政策にどのように表現され、天保期においてどのような意義をもつかを追究したものである。江戸周辺農村は、化政期に至るまでに

商品生産が広く展開しており、この過程のなかで階層分化が進み、窮民層が形成され、天保期にはこの存在が無視できないまでになっていた。それに対し、幕府の政策は江戸府内への対策を優先し、周辺農村における窮民救済は村へ転化され、富農層の力に委ねられ勝ちであった。天保期の江戸周辺の窮民層は幕府に警戒される程の存在となってきたており、みずからを窮民たらしめている根源に闘争をいどむのであり、この力を見落すことはできなかった。しかし、これらの層は階級を形成するほどには進んでいなかったとしている。文末で天保期の幕府の窮民対策は旧態依然たるものがあり、問題をあとに残しながら水野政權は潰え去ったといわれるが、この点をさらに掘り下げていただけると、なおいっそう興味のもてる論考になるといえよう。

### ③長谷川伸三「三河山間村落における天保凶作と暴農」

この論文は山間部の村落稲橋村とそこを基盤にする豪農古橋家を取りあげ、農民闘争とのかかわりを分析して、天保期の特質を究明している。古橋家は文政期に村方騒動と経営悪化の危機に直面しており、豪農経営の転換をはかっている。その方向は天保凶作と天保七年の加茂一揆のさなかに確立され、領主の奪取強化に対しては合法的闘争をもって抵抗し、その以前には吸着・収奪の対象であった村・小前農民を共存の対象としてみるることによって村落共同体の再生と小商品生産の基盤確立をはかったとする。これは自家の繁栄と村勢の向上をともにはなかったものであり、その評価について、天保期に転換期をむかえた豪農の幕末・維新时期へかけての進路を、貧農・半プロ層への対決、ブルジョアの商品経

済の担い手、また下からの政治的変革の主体としてとらえるかという見方を提示されながら、そのいずれにも直接的な結論づけをされていない。しかし、長谷川氏の見解は注目されるべきものである。

### ④中山清「米作単作地帯における地主的土地所有の展開」

中山氏は、まず戦後の地主制研究が、商品作物生産地帯に集中し、江戸期におけるブルジョアの発展を追求する観点から考察している。まず、商品生産地帯の農民層分解と富農経営から地主経営への転化を追求し、米作単作地帯における研究は不十分であることを指摘している。そして、明治期以降の地主制が、大地主地帯としての特質を示す裏日本米作単作地帯を主要な基盤としていることは明らかであり、これらの地主層の展開過程の基盤は江戸期に形成されたとしている。以上のような問題意識に基づき、新潟県蒲原平野部の地域分析を通し、天保期を中心とした地主展開の基盤を確め、地主的土地所有・地主小作関係の段階規定とその矛盾を明らかにしようとしたのが本論文である。

大地主を江戸期型Ⅰと江戸期型Ⅱ幕末期型とに分け、天保期をその両者の固定と成長とが交錯する時期であるとし、大地主層が、安政・慶応期に固定・変動する基盤の芽生も天保期であるとする。二種の巨大地主の経営形態から中小地主との関係、さらに小作層の分化にもふれる実証的な論文であり、地域性、社会構造など綿密な地主制の研究の必要性を示唆している点、注目したいと思う。

### ⑤ 安藤保「近世後期九州天領における新田開発」

この論文は、天領日田地域において塩谷大四郎が日田郡代在任中の文政期から天保期にかけて集中的に新田開発を行ったことに着目して、この新田開発における資金調達のあるり方を検討することによって、従来説かれている塩谷の民政家像を再検討し、また新田開発と日田金の関係、および広瀬久兵衛の役割を考察しようとしたものである。その結果、豪農商による自発的開発が期待できない状況下での新田開発は、郡代・新開役所の主導のもとで強制的に行われ、日田商人の一部参加も新開事業による資金貸付市場の拡大に伴う日田金の需要に対し強い関心が向けられたためであり、農民にとっても資金・労働力両面で苦痛に満ちたものとなり日田農村の疲弊を増長することに結果したとされている。

すなわち、塩谷がこの新開事業を強制したのは、幕府への献身の表示を優先させたからであるとし、後年の塩谷の民政家像を疑問視している。しかし、分析の対象が三例を通してであり、日田天領地域の他の新田開発にも一般化できるのかなど、総合的成果にもとづく評価が要請されよう。

### ⑥ 三浦俊明「御三家名目寺院貸付の展開と南関東農村」

この論文は天保期の危機的状況のなかにおける村落支配者層と封建領主層の対応形態について考察したものである。具体的には遊行寺の尾州、紀州家名目祠堂金貸付の内容分析によって南関東農村の再編形態についての究明に重点が置かれている。

この中で三浦氏は遊行寺を含めた封建領主層はより上級の権力を背景にして年貢（高利貸）収奪の徹底を図り、そのために村落

支配者層の高利貸活動を認め、これと共生関係を保つことによって体制の強化につとめたことを指摘し、論述している。さらにこの関係は天明～天保期に発生した飢饉を契機として激化してくる農民闘争に対応する過程で生じてきたと述べ、これは関東農村再編策の一環として捉えることができるとしている。

このように本論文は寺院の祠堂金貸付を単なる寺院経営や金融制度の側面から促えるのではなく、天保期段階の封建領主の農村支配政策や貸付対象となる周辺村落の動向と関係させながら検討を加えている点が特徴である。

しかしながら、やや三浦氏の意図するところとずれるが、遊行寺を含めた近世寺院の性格を単純に年貢（高利貸）収奪を目的とする封建領主層と概括している点に疑問を感じざるをえない。その特質はやはり中世的寺院権力の体制的否定と再編過程に求められるべきではなからうか。祠堂金貸付の問題もこの点を除外して理解することはできないと思われる。

したがって、今後は祠堂金貸付の問題を含めて、こうした寺社領の性格についてさらに検討を加える必要があるだろう。

## ◇ 都市と市場構造の変動

### ① 南和男「江戸人口の過密化対策」

この論文は、近年盛んになってきた江戸の都市研究の中でも、最も現実的な人口問題について取り組んだものである。

本論は、江戸における都市問題の根源は人口の過密化にもとづくものである、という視点に立って、天保一四年に発令された

「人別改令」成立に至るまでの歴史背景と、同令の人口過密化対策について論及している。

前者については、享保期の対策は延宝・元禄期の社会的活気を背景に拡大した町並の中で無宿対策に重点を置いた人別改が行なわれ、また寛政期には宝暦期以後の農村荒廃による潰百姓の都市流入に対する対策が必要になり旧里帰農奨励令を実施したが、十分な現実的・経済的な裏付けがなかったため失敗に帰した。しかし、これを契機に流入民に対する幕閣の認識が従来の惰民という考え方から社会的理由にもとづいて簇生する者が少なくないというところへ方に変化し、対策を構ずる必要に迫られてきたことを指摘している。

このような背景のもとに天保一四年に発令された人別改令は、特に人口増加を抑制するための帰農策は現実的な立場から反対した町奉行を抑えて老中は水野忠邦と島居忠耀によって行なわれた。同令の実行は流入民の強制送還は暫定的に見合わせたものの、人口の増加抑制と人別の個別視に重点を置き、さらに上方にも同趣旨の施行を命じて、東西大都市圏の人口集中を抑制する意図をあらわし、出稼人の仮人別書上の作成や人別改の行政組織の整備をはかったことを指摘している。また同令と前後して出家人・尼僧などに対する対策、特に還俗促進がはかられたことも取りあげられている。

以上のような分析にもとづいて南氏は天保期には男を中心にした流入民の減少をもたらしたが、同時に出稼人の減少も生じている現象について、今後の研究は単に都市側の問題としてだけでなく、

く、農村自体の問題とも関連させて究明する必要を強調している。

#### ②林玲子「天保期における新興江戸間屋」

この論文は、著者が幕藩制社会解体過程の分析を行なうに当たり、その基礎構造と市場構造の変化、及び両者の関連を解明するために、明治三〇年代に東京で第九位の地位にあった織物間屋近江店丁吟に事例を求めて、天保期における個人資本の動向とからめて、この時期から嚮頭する新興間屋の成長過程を明らかにし、明治期への展望を与えている。

すなわち、近江店丁吟の成長は近世後期に起った江州持下り商人の関東・東国進出という大きなうねりの中で、天保二年江戸店を開設して販売の拠点をつくったとし、販路の拡大は行商により、従来の間屋層と競合しない商品を、庶民に着用を許される範囲内のものに重点を置き、城下町や主要街道沿いの都市を避け、むしろ脇街道や農・漁村を背景とした江戸地廻りの在町中心に行ない、農・漁村における貨幣経済の浸透に乗って新興呉服間屋として発展を遂げる過程を実証している。

嘉永の株仲間再興令以降は丁吟京店の間屋加入と相まって同店は三都を結ぶ為替取引の要となり、呉服方から金方への変貌を遂げ、新御用商人としての地位を固め、一方では関東商人の重要な資金融通源となったことを明らかにしている。

以上のような成果は、著者の『江戸間屋仲間の研究』を個別事例の基礎的な分析によってさらに発展させ、近代における日本資本主義の展開との関連でとらえようとする意図を明示しているも

のである。

### ③川名登「天保期の関東河川水運」

この論文は、河川水運史のなかで化政期から天保期にかけて一般的にみられる「河岸の衰微」・「河岸問屋の困窺」という現象に着目して、この原因を上下利根川・鬼怒川水運の結節点で、江戸川と直結する下総国境河岸を事例として追求することによって、この期の関東河川水運の持つ問題点を明らかにしようとしたものである。そこで、「河岸の衰微」の原因は、既成河岸以外に現われる新河岸・新ルートだけにあるのではなく、既成河岸の特権の河岸問屋の統制下を離れて自由な稼ぎにおもむこうとする小船持・船頭・水主、それと結ぶ農間駄賃馬稼等の執拗な闘争の結果であると共に、地域市場の発展、江戸地廻り経済圏の変質に対応する江戸行輸送荷物の減少の結果でもあったのであり、このような状況こそが天保改革直前の関東河川水運の内包していた問題点であったと結論づけている。なお、江戸への流通経路の改変とも関連して、商品荷物の荷量の変化や領主米の動向を「現象」面からではなく、具体的にされる必要がある。

### ④林英夫「近世宿場町における諸式徴発制」

この論文は、近世的交通態様のなかでみられる賦役制度の一つとして、宿駅に大名が休泊するさい、近郷村々から諸式諸道具を徴発し運搬労働を伴う制度が存在したことを明らかにするため、尾張藩領の美濃路起宿を中心に考察したものである。

この制度を氏は諸式徴発制と名付けて、起宿での諸式諸道具徴発の順序・適用者・物品の種類を具体的に示して展開されている。

る。そして、この制度が他宿においても一般的に存在したのであること、また諸式調達の方法が徴発制から請負制へと変化していることを想定され、尾張藩では徴発制が近世全期を通して維持されていた点にその特徴があるとされている。しかし、諸式徴発制が尾張藩の制度にとどまることなく、近世制度として全国宿駅に存在するのか、また他の賦役制度（特に助郷制度）との関係、さらに徴発制から請負制へと変質するプロセスを幕藩制の展開に照らし合わせて明らかにされる必要がある。

## ◇階級対立と支配の変容

### ①増田広実「郡内騒動とその鎮圧について」

この論文は、天保七年（一八三六）の甲斐国の郡内騒動を甲府勤番支配や代官の力のみでは一揆を鎮圧することができず、高島藩などの出兵を得なくてはならなかった過程について、幕府直轄支配の甲斐の支配体制の動揺について考察しようとしたものである。

一・二章は、天保期の甲斐国の支配と郡内騒動の概要と高島藩の出兵を中心に鎮圧の過程を明らかにし、三章では一国天領ともみられる甲斐国支配の諸矛盾とその脆さについて考察している。この点、たしかに支配者からの郡内騒動の考察という観点からは評価できるが、支配体制のもつ矛盾についての考察が一般論で終ってしまった感が強く、この地域の特徴が余りみられない。この点、一揆の鎮圧過程のなかで登場してくる郡中惣代などの存在、役割、動きなどを中心に究明されるならば、さらに問題の深化が

はかられるのではないかと思う。

## ②青木美智男「天保期羽州村山地方の農民闘争」

この論文は、天保四年から同六年まで全国的に爆発した一揆・打ちこわしによって、幕藩制支配の構造上の深刻な矛盾が巨大な社会的動揺をひき起したとする視角にもとづき、闘争がいかなる要求をもつてどのように実現をせまり、その結果として、幕藩領主層にいかなる政治的対応を余儀なくさせ、それがまた幕藩制の全構造をどのようにゆがめ、人民支配の体制を動揺させたかという点を明らかにしようとしている。農民層分解の深化により、村では米穀の確保が課題となり、郡中議定で米穀等他郡移出の差留を決定し、領主側も同様の政策をとる。しかし、天保七年、幕府は幕領に対して廻米強化策をとり、郡内に流通する農民米の廻米を行うに至り、農民は強訴におよび、代官領での廻米量増大政策がスムーズにいかなくなる点を指摘している。ここで、どの程度の一揆側の飯米確保要求が、領主側より受容されたのか、また、それが幕府全国支配貫徹のための再生産構造をどのように動揺させたのか、これらが明確に実証されていない。さらに、天保期に焦点を絞ったために、近世後期の中での天保期の一揆の位置が明らかになっていない点などが今後の課題となるであろう。

## ③保坂智「天保期南部藩における家臣団の動向」

この論文は、第一に家臣団内部の分散・個別的な藩政離脱の諸行為、第二に家臣団の行為と人民の諸闘争とのかわり、という点に留意しながら、天保期の南部藩を素材に、幕藩制解体期における家臣団の存在形態とその行動様式を明らかにするとともに、

幕藩制国家解体を説明しようとするものである。内容としては、知行地の不作付地率の増大と藩の借知や扶持米・銀減額政策が家臣団の財政的窺乏の要因であるとしており、家臣団の秩序意識に反する藩主側近体制（金上侍・軽格の武士）に対し、「表役」や下級家臣団の不満が集中するとしている。家臣団は、窺乏打開のため、知行地農民への収奪強化となつて表われ、これが農民闘争を引き起こし、逆に家臣団の知行地からの収奪を限定・低下させる。これによって、下級家臣団は出奔という形で藩体制を離脱し、天保七年の全藩闘争により、中・下級家臣団と門閥譜代層の活動を活発にし、「徒党」が形成され、弘化三閉伊一揆を契機に御家騒動が激化していくとしている。新しい問題の視点（天保期の人民闘争と社会変革・上」序章参照）で構成されているが、人民闘争が家臣の反藩政的行動を導き出したとする点、両者が直接的にどのように結びつくか、疑問が残っている。

## ④長倉保「小田原藩における報徳仕法について」

この論文は副題にもあるように、小田原藩の報徳仕法のうちでも特に一村仕法を重視して述べているといつてよいであろう。尊徳仕法は発業の時点から紆余曲折があったが、金次郎の軒別廻村の実行によって飢民救済の成果をあげる。しかし、郷拝借金八万両余をはじめ、債務償還に苦しむ村々へ報徳金貸付が進行すると、その成果を背景にして金次郎が「地方引受」を申し出、藩との紛糾が生ずる。この紛糾に終止符を打ったのが、藩による金次郎への曾比・竹松両村に限つての一村仕法の委任であった。そして、この仕法が展開され成功するとともに再び紛糾を始めるので

あり、小田原藩政は金次郎のいう「一元一体」ではなく、「領内限り」での一村仕法を実現させるべく、これを藩の改革路線に包摂し、変質させていくとしている。金次郎へ一村仕法を委任した場合、窺民の救済となるかあるいは窮民の反抗を危惧せねばならなくなり、報徳仕法は復古的野望にささえられた仕法であったところに、その存在意義があり、小田原藩で果たした役割も、その性格に依拠するかぎりにおいてであったと結ばれている。この点はまさに当を得ているといえよう。

以上、各論文別に概要を述べたのであるが、やはり幕藩制国家の解体過程の天保期の問題を統一的理論的に展開ができたかという点からは不十分さは否めない。編者北島先生をはじめに「天保期の歴史的位置」について、幕藩体制の解体過程は危機の展開に依じて、いくつかの画期があることを指摘され、「危機に対応して幕藩政改革が全国的規模で実施されるが、その歴史的本質を明らかにするには、克服すべき対象とされた危機を統一的視点においてとらえることが前提となる」と述べられている。そして天保期および天保改革の問題点を研究史をふまえて、「問題の所在」「天保期の経済段階」「天保期の人民闘争」「天保改革の特質」の四点から整理されておられるが、なお、この天保期については、「その固有な階級生産構造の解明はまだ十分とはいえない。何よりも現在の研究状況は、天保期あるいは天保改革の諸側面や歴史の本質を個別的、具体的に明らかにすることを迫られた段階にあるといえよう」と結ばれている。

この意味からは天保期の研究は、今後の重要な研究課題といつてよい。現段階においては直ちに国家史的な論点から直ちに天保期の諸問題を統一的に把握できたとはいえないが、本書の個別分析を通じて、天保期の研究が一段と促進されたことは注目してよいと思う、各論文に十分な論評を加えることができず、単なる紹介に終わった点も多かったが、今後の研究深化に一層の期待をよせていきたい。

なお、本書の書評は、大学院における「日本史学特殊講義」の報告をまとめたものである。研究参加および執筆分担は、村上直教授を中心として仙石鶴義・佐々悦久・池田昇・高木正敏・根岸准子の六名である。(A5判 五四九頁 吉川弘文館 昭和五十三年一月刊 定価六、六〇〇円)

〔編集付記〕 本誌前号に本書の上巻にあたる北島正元編『幕藩制国家成立過程の研究——寛永期を中心に』の書評があります。

#### 前々号要目(第三十一号)

宋代禁榷下解塩の配給について	河上 光一
武蔵野台地における弥生時代の地域的様相	小出 輝雄
足利義教の嗣立と大館氏の動向	設楽 薫
近世における郷組の存在とその意義	根崎 光男
化政・天保期における江戸周辺農村の構造と村財政	池田 昇
川越藩相州分領の地方支配について	筑紫 敏夫
明治維新における旧八王子千人隊同心の動向	馬場 憲一